第43回 全日本中学生水の作文コンクール
和歌山県入賞作品集

枯木灘

和 歌 山 県

表紙の写真『枯木灘』（和歌山県ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞ　ﾌｫﾄﾗｲﾌﾞﾗﾘｰより）

枯木灘は、白浜から串本にいたる延長 70km の海岸線で鋸の歯のように出入りし、珍しい岩礁や島があり、特異な海岸景観を展開しています。

写真は、激しい海流が陸の黒島に当たり、二つに裂けた波が再びぶつかり合う様は婦夫波や合掌波と呼ばれる枯木灘を代表する光景です。

あいさつ

水は、あらゆる生命の根源であり、私たちの暮らしや、農業、工業などの産業活動を支える限りある貴重な資源です。一方、近年では、世界的に渇水、洪水が頻発し、水利用の安定性や安全で良質な水資源の確保が重要な課題となっています。

こうした中、水を私たち共有の財産と位置づけるとともに、国民の皆様に、健全な水循環の重要性についての理解を深めていただくため、毎年八月一日を「水の日」と定め、様々な関連行事が行われています。

この一環として、和歌山県では、中学生を対象に、昭和五十四年から続く「全日本中学生水の作文コンクール」を実施しており、本年は、五二〇編の応募をいただきました。

いずれの作品も、「水について考える」というテーマにふさわしく、日常生活での体験から学んだことや、海外の水事情、地球規模の出来事に視点を置いたもの等、つい忘れがちな水の大切さ、有り難さについて考えさせられる作品で、水を大切にしようという思いがよく伝わってまいりました。

このたび、入賞作品十八編を作品集にまとめましたので、ご家庭や学校でご活用いただき、水についての関心をさらに高めていただくことを願っています。

最後に、本コンクールに応募された中学生の皆さんと、ご担当いただいた先生方に厚くお礼申し上げます。

令和三年八月四日

和歌山県企画部長　横山　達伸

もくじ

優秀賞

水の大切さ、ありがたさ。　和歌山信愛中学校　二年　重松　那津実・・・・　1

生命を繋げる水　和歌山県立田辺中学校　三年　寺段　愛良・・・・　3

水がつくる循環　和歌山県立田辺中学校　三年　中村　柚月・・・・　5

入選

水の大切さ　すさみ町立周参見中学校　二年　石垣　結菜・・・・　7

世界の水のために僕にできること　すさみ町立周参見中学校　一年　岸　裕士・・・・　8

日本の水の素晴らしさ　和歌山県立田辺中学校　一年　坂本　真唯・・・・　9

綺麗な水を飲めるということ　和歌山信愛中学校　二年　野中　沙夕里・・・・　10

水と木のつながり　和歌山県立田辺中学校　二年　村上　すみれ・・・・　11

佳作

限りある水　和歌山県立田辺中学校　二年　岩本彩乃・・・１２

泥水を飲む子供たち　近畿大学附属和歌山中学校　一年　鎌苅隼英・・・１３

これからの魚との未来　和歌山県立田辺中学校　二年　木本花菜・・・１４

安全・安心な世界にするために　海南市立巽中学校　二年　楠本志保・・・１５

海とのつながり　和歌山市立加太中学校　二年　島本翼・・・１６

水と言の葉　和歌山信愛中学校　二年　谷桃子・・・１７

自分達にできること　和歌山県立田辺中学校　一年　田野桜清・・・１８

美しい地球　和歌山信愛中学校　二年　野間心葉・・・１９

水との共生　和歌山県立向陽中学校　二年　濱本光祐・・・２０

私たち人間ができること　すさみ町立周参見中学校　一年　前田真優・・・２１

（掲載順序は五十音順です。）

優　秀　賞

水の大切さ、ありがたさ。

和歌山信愛中学校　二年

重松（しげまつ）　那津実（なつみ）

「水」と一口に言っても、たくさんの使い道があります。例えば飲料水や洗濯、お風呂など。使いたい時に蛇口をひねれば、使いたいだけのきれいな水をすぐに手に入れることが出来ます。しかも日本では蛇口から出てきた水をそのまま飲む事もできます。私達はきれいで安全な水をいつでも自由に扱えるのです。水に困ることのない生活を送っている私達にとって、改めて水について考えることはとても重要な事だと思います。

少し前にユニセフの資料を見る機会がありました。多くの途上国では、安心して飲める水が近くにはなく、子供たちが水源まで水を汲みに行きます。遠い道のりを何時間もかけて歩き続けています。それでも手に入れる事ができる水は、茶色く泥や細菌、動物の糞尿が混じった安全ではない危険な水です。そして、やっとの思いで手に入れた水は、感染症を引き起こしやすく、命を落とすことさえあるのです。さらに、水汲みで疲れ果ててしまった子供たちは、学校に通う時間も体力もありません。

このことは、私にとってとても衝撃的な事でした。日本では蛇口から出てくる水を、そのまま当たり前のように飲むことができます。水道水のせいで、感染症にかかったという話は聞いたことがありません。途上国の子供のように、水汲みをする時間も必要がないので、学校へも毎日通えます。こういう生活が当たり前になっていた私にとって、何時間もかけて水を汲みに行くという事実は想像もできません。私が普通だと思っている毎日は、場所が変われば普通ではない毎日になってしまうのです。

学校のホームルームの授業で、ＳＤＧｓについて学んでいます。ＳＤＧｓの六番目の目標は、「安全な水とトイレを世界中に」というものです。二〇三〇年までに世界が達成すべき目標の一つとして、すべての人が安全で安価な飲み水を手に入れるようになることがあげられています。実現するためには、水を清潔にするだけではなく、安全な水を管理する仕組みを整えることが重要です。

近くにきれいな水の出る井戸ができれば、これまで水汲みのために学校に通えなかった子供たちは、学校へ行く事ができます。そしてさらに、病気にかかりにくくなり、学校教育で石鹸を使った手洗いなどの衛生習慣も身につきます。このことから、私ははやく地球に住むすべての人々に、きれいで安全な水が行き渡るようにしなければならないと思いました。

日本では、すでにきれいで安全な水が手に入るからと言って、私たちは何もしないでいいわけではありません。私たち一人一人が出来ることを考えなければならないのです。ユニセフの募金に協力するのも一つの方法ですし、貴重な水を大切に使うという意味で節水も大切です。節水は、お風呂の水を洗濯などで再利用したり、こまめに蛇口を閉めるなどがあります。少しのことかもしれませんが、これらのことをたくさんの人が気をつけて行動出来れば、大きな節水効果を生み出すはずです。

このように、私たちにとって生活をする上で大切な水を守っていくことが重要です。途上国の人々にもきれいな水が当たり前になるように、私達一人一人が水に関心を持ち、意識しなければならないと思います。私たちの生命にとても関わる水の大切さやありがたさをより多くの人が理解することで、一人一人の水への意識が変わると思います。世界中の人が水に困らず、笑顔でおいしいと思えるような環境を作るのは私たちの使命です。ＳＤＧｓの目標では二〇三〇年までの目標ですが、できる限り早く、世界中の人がどこにいても、きれいで安全な水を手に入れることができる世界が来ることを私は強く願います。

優　秀　賞

生命を繋げる水

和歌山県立田辺中学校　三年

寺段（てらだん）　愛良（あいら）

二〇二一年二月ＮＡＳＡが二〇一二年に次いで二度目の火星探査車を着陸させた。生命が存在していた証拠を探すために。そして四月二〇日火星で二酸化炭素から酸素を作ることに成功したと報じられた。二月に着陸した火星探査車に搭載された装置において、火星の大気の二酸化炭素から酸素を作る実験が行われ、無事成功したのだ。なぜ火星で二酸化炭素から酸素を作る実験をしたのだろうか。その理由は、「人類は火星を目指しているから。」この理由に尽きる。つまり火星移住だ。そのために様々な技術開発を手掛けている。そもそもなぜ人類は宇宙に行くのか。その理由として、数十年から数百年程度の未来には、地球環境の変動や資源の枯渇、さらに遠い未来を見通せば氷河期の到来、隕石の衝突、大陸の変動など、様々な激しい環境変動が地球と人類を待ち受けているからだと言われている。

私には想像を超えた内容であり、ただの物語のように受けとめてしまう。しかし、実際この地球でおこっている物語であるなら、私も主人公の一人であることは間違いない。ふと机の上に置いている地球儀を眺めてみた。きれいな球、そして広がる青。こんなにも美しい青が広がる地球の未来が危ぶまれていることに、腹だたしさを感じ、何も出来ない自分にむなしさを覚えた。そして、本当に何も出来ないのか、また何もしていないのかと考えることにした。広がる青は海。つまり地球上には七割の海が存在し、地球上の水の九七パーセントが海にある。太陽からの熱でそれが蒸発して雲になり、雨となって陸を潤し、また海に戻る。そのような壮大なスケールの水循環の過程でおびただしい数の生物が養われ、また気候が安定する。このように海は地球上の生物と環境に大きな役割を果たしていることがわかる。つまり、生物の生存に水が必要なことは明らかで、この水循環の過程が維持出来なければ、地球から生物が存在しなくなるということが言える。

物心ついた時から言われている「水を大切にしよう。」「海をき

れいにしよう。」難しいことはわからなくても、私達は気付いた時には、水や環境へのキーワードのもと、標語やポスター作り、道徳や理科の授業で学びを深めてきた。そして今、私が気になる言葉にＳＤＧｓがある。その目標の中でも特に「一四海の豊かさを守ろう」だ。海の汚染がより深刻な問題となっているのは、私の目から見ても明らかであった。海岸にはゴミが無造作にうちあげられ、それらを口にした生物の危機的状態、傷つき命を奪われた姿を目にすることも少なくない。そして特に地球を脅かしているものがマイクロプラスチックだ。人々が生活する上で使用するさまざまなものに使われている、直径五ミリメートル以下の物質。自然界に存在しないものは、自然におこりうる循環にとけこみ、存在しうることが不可能なのだ。そして今の現状のまま増加し続ければ、二〇五〇年には魚の量を上回るマイクロプラスチックが海に存在することが予測されている。この事実を知り、私が出来ることは何か考えた。何かを購入する際は、まず原材料を確認してプラスチック製品の購入を可能な限り控え、紙・木など自然に近い素材を選択することが中学生の私に出来る一歩だと思う。そして、様々な奇跡の中で存在しうる全ての生命が循環し、命がつなげられるよう、水への感謝を忘れず、今後維持・継続できる美しい地球を後世に伝えていきたい。

優　秀　賞

水がつくる循環

和歌山県立田辺中学校　三年

中村（なかむら）　柚月（ゆづき）

どんなに緊張することがあっても、水を口に含めば少しは気持ちが和らいだ。どんなに疲れることがあっても、お風呂に入れば体が癒やされた。新型コロナウィルスの影響により、たくさんのものを失っても、水は変わらず私たちのそばにいた。私たちにとって、当たり前すぎて気づけていない、「いつでもきれいな水がある」という幸せ。この作文がフィナーレを迎える頃、あなたにこの幸せを感じとってもらえるだろうか。それでは、「水」について考えていこう。

私の父の朝のルーティンはラジオを聞くことだ。休日は、仕事に行く父より遅く起きる私が、大きなラジオの音で目を覚ますこともしばしばある。ある日の朝、なんとか起き上がった私は、半分夢を見ているような状態でトイレを済ませ、起きたてフラフラの足で洗面所に行って洗顔し、朝食をとっていた父と「おはよう」と挨拶を交わしてようやく席についた。向かい側にいる父の傍らではラジオが元気よく朝の静かな空気を揺らしていた。私は、朝はテレビの情報番組を見てご飯を食べたい派であるため、テレビをつけられないことは少し残念だったが、ラジオに耳を傾けることにした。あれはちょうどお茶で口の中を整理しているときだっただろう。朝のラジオ番組にはあまり似合わない深刻そうな声が聞こえてきた。

「世界には朝早くから夕方近くまで、一日中歩いて水を汲む子供たちがたくさんいます。ようやく手に入れたのは飲めば命の危険がある水。あなたはこの現状を知っていますか。」そのメッセージは、脳がまだ眠っていた私に衝撃を与えた。漠然とした事実としてしか知らなかったその水問題が、妙に現実味を帯びて感じられた。今朝も当たり前のようにトイレで大量の水を流し、大量の水で洗顔をし、お茶を口に流し込んでいる自分。そんな自分に対し、世界には大変な思いで水を汲み、その水すら安心して飲めない人たちがいるのだ。私の心の中ではいろいろな感情が蠢いて

いた。

どうだろうか。これが世界の現状だ。もしかすると、「日本は関係ない」「自分たちがどうすることもできない」というふうに思う人もたくさんいるかもしれない。確かに、日本ではほとんどの人が普通に水を使えているし、何ができるのかと言われれば募金くらいしか思いつかない。しかし、世界がネットワークでつながる今、世界の問題が世界で共有されなくてよいはずがない。たとえ、水問題の解決につながる大きな革命が起こせなくても、一人一人が問題を共有する意志を持つことが、解決への近道になるだろう。

このように「水」について考えることは、「世界」について考えることにつながる。そして「世界」について考えることは、自分たちは恵まれているのだと、普段は気づけない自分たちの「幸せ」を知ることにつながる。自分たちの幸せを知れば、それがまた水に対する感謝であったり、水から知る幸せを他の誰かに伝えようとしたりして、「水」について考える機会が生まれる。水が海から蒸発して上空へ、雲から雨や雪になって降り注ぎ、川から海へ至る循環のように、水は私たちの思考さえも循環させる。そんな私たちの力とは比にならないくらいの大きくて柔軟な力を持つ水は、まだまだ秘めた可能性を持ち合わせていそうだ。

水は今日もさまざまな場所で、形で、循環している。

入選

水の大切さ

すさみ町立周参見中学校　二年　石垣（いしがき）　結菜（ゆいな）

水は人間だけでなく地球上のあらゆる生き物にとって、欠かすことのできない大切な命の源です。

私たち日本人は、飲んだり食べたり、トイレ、風呂、洗濯などで、一人一日当たり約二百九十リットルもの水を使っています。それに今は新型コロナウィルス感染症が流行しているため、以前よりも手洗いうがいを徹底的にする方が増えていると思います。そうなると、もっと水を使っているかもしれません。

私たちの暮らしを支える地球上の水の総量は、およそ四十億年前からほとんど変わっていないそうです。水は絶えず地球を循環しているのです。その約九十七・五パーセントが海水で、川や湖、地下水などの淡水は約二・五パーセントです。私たちが容易に利用できる水は、地球上の水全体のわずか〇・一パーセントに過ぎないのです。

また、日本の年平均降水量は一千六百九十ミリメートルで、世界平均のおよそ二倍となっています。しかし、日本は国土が狭く人口が多いため、国民一人当たりの水資源量は、世界平均の三分の一程度と決して多くありません。だから、普段蛇口をひねると当たり前のように出てくるきれいな水は、実はとても貴重なものだったのです。

世界に目を向けてみると、世界人口は、現時点で約七十七億人にのぼると推測されています。そのうち約九億人が、近くに水源がなく、池や川、野ざらしの井戸など飲用に適さない水源にたよるしかないのです。ようやく水源にたどり着いたとしても、その水は、泥や細菌などが混じった危険な水です。このような水を飲むと、最悪の場合には死に至ることだってあると思います。

こうした状況を改善していくために、今世界ではＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）の目標六「安全な水とトイレを世界中に」に取り組んでいるのです。そのターゲットとして挙げられているのは、二千三十年までに「すべての人が、安全に管理された水と衛生的な環境を利用できるようにする。」「限りある水資源を将来にわたって使うための取り組みを進める。」などがあります。こうした問題を解決するために、途上国では安全な水と衛生環境の確保、そして先進国には、限りある水資源を守るために水源林の保全など様々な取り組みが求められています。

そう考えると、私の今までの生活の中で、改善すべきことがたくさん見えてきました。例えば、水だからと思って、コップに入れた水を、いらなくなったらすぐに捨ててしまったり、歯磨きをする時も、たまに水を出しっぱなしにしていたりなど。自分が今まで無駄にしてきた水の一滴一滴が、世界のどのくらいの人々を救えたでしょうか。どれくらいの人がその水を追い求めていたでしょうか。振り返ると、今までの自分の一つ一つの行動がとても恥ずかしく思えてきます。

このように、世界は水のおかげで成り立っていると言っても過言ではないでしょう。いつも蛇口をひねると、きれいで安全な水が出てくる。日本では当たり前のことだけれど、世界ではそれが決して当たり前ではないと言うことを多くの人に知ってもらいたいです。一人一人のちょっとした行動が、よりよい世界につながっていくと私は思います。

いつか、世界中のみんなに安全で安心な水が届くことを願っています。

入選

世界の水のために僕にできること

すさみ町立周参見中学校　一年　岸（きし）　裕士（ゆうじ）

水は、僕たちにとって必要不可欠なものです。現に、僕たちの体は約六〇パーセントが水分でできており、四～五日間水分を摂らなければ死に至ると言われています。それほど大切な水ですが、決して無限に存在しているわけではありません。

地球上の陸地と海洋の割合は、三対七とされており、存在する水のうち九七パーセント近くが海水です。僕たち人間が利用できる淡水と呼ばれる水はわずか二パーセントしかありません。僕はこの事実に驚きました。

僕はある日、マダガスカルの子供たちが水くみをしているというテレビCMを見ました。マダガスカルはアフリカ大陸の南東海岸部から沖へ離れた西インド洋に囲まれた島国です。僕はそのテレビCMで、そんなマダガスカルで暮らす子供たちが毎日八時間近くを水くみに費やしているという現実があること、またその水が衛生的に良くなく、飲めば死に至る可能性もあることを知り衝撃を受けました。そのCMではマダガスカルに井戸を作るための寄付金をお願いしますというような内容でした。確かに、募金をすることによって、井戸を作ることに少しでも貢献することができるし、すばらしいことだと思いました。しかし、自分にできることは募金だけなのか、何か他にできることはないのかと考えました。

僕が住んでいる町は太平洋に面しており、僕もよく海に泳ぎに行く機会があります。泳いでいるときに海水を飲んでしまうこともありますが、しょっぱくて飲めたものではありません。調べてみると、海水の塩分濃度は約三．五パーセントで、百ミリリットルの水に三．五グラムの食塩が含まれていることがわかりました。

地球上の七〇パーセントをも占める海水。この海水を飲料水に変えることができれば、世界の水に関する課題を少しでも解決できるのではないかと思いました。海水は、蒸発させたり、塩分のみを通さない特殊な膜を使ったりすれば飲料水に変えることができます。井戸を掘っても地下水が出てこないこともありますが、このような方法を使うことによって、確実に海水から飲料水を作ることができます。

世界の水のために僕にできることは少ないかもしれませんが、将来、今よりもさらに海水を飲料水に変える技術が普及していったときのために、海のゴミ拾いなど小さなことから始めていきたいと思います。海をきれいにすることによって、より衛生的な飲料水を作ることができると思うからです。

また、レジ袋を有料にするなど、最近ニュースで良く聞く海洋性プラスチック問題。海は人間だけのものではありません。海のゴミ拾いをすることは、飲料水の課題だけではなく、海で生活する動物たちにとっても大切なことだと思います。

世界は海で繋がっています。僕の町の海をきれいにすることが、巡り巡って世界の海をきれいにすることに繋がると僕は考えます。

入選

日本の水の素晴らしさ

和歌山県立田辺中学校　一年　坂本（さかもと）　真唯（まい）

私は中学生になり、小学生の時に使っていたランドセルが必要なくなった。しかし、ずっと大切に使っていたので、まだきれいな状態で、捨てるにはもったいないという思いから、このランドセルを寄付できないかと考え、色々と探してみると、「ランドセルは海を越えて」というキャンペーンを見つけた。そのキャンペーンは、紛争と混乱の続くアフガニスタンの子供達にランドセルや文房具などを届け、学習支援を行うというものであった。私は、そのキャンペーンに応募し、ランドセルと文房具をアフガニスタンに贈った。

しかし、私は、アフガニスタンという国名はニュースなどで知っていたが、どのような国か知らなかったので、その国の水事情を中心に調べてみることにした。

ある情報によると、アフガニスタンは、生活用水として、水道水あるいは井戸水を使用しているとあった。しかし、水道は狭い一部の地域でのみの普及であり、安全な水の提供はなされておらず、一般細菌や大腸菌などが検出されることが稀ではないとのことであった。よって、そのまま飲料水として使用することはできず、必ず沸騰させてからしか使うことができないそうである。

また、アフガニスタンの二十二県では、冬季の極端な乾燥により、必要な水を確保できず、百万人以上の人々の生活に影響が出ており、最も影響を受けている十県では２０％から３０％の水源が干上がったと報告されている。そうして、食料と安全な水の不足が広がり始めているそうだ。このような状況下で、以前から栄養不良率が高いこれらの地域では、子供達の健康は悪化する一方であるとのことであった。

私達が住むこの日本の水事情はどうであろう。どんなに不便と思われる田舎であれ、水道の蛇口をひねると、そのまま飲むことのできる安全できれいな水が大量にいつでも使用することができる。風呂やトイレに使う水も、そのまま飲むことができる水を使っている。そのような国は日本だけだそうだ。調べてみると、現在の日本の水道普及率は９７．５％を越えており、「国民皆水道」がほぼ実現している。また、日本の水道水の水質の良さや漏水率の低さなどの観点からも世界中でトップクラスのシステムを保持しているとのことである。そして東京都水道局は、「世界最先端の都市水道モデル」として名を轟かせているそうである。私達は、先人が築き上げてくれたこのような日本の近代水道の実態をあまりにも知らな過ぎているのではないだろうか。また、その安全を守り続け、技術向上のため歩み続け、私達が安心して生活できるよう支えてくれている方々がいることをどれほどの国民が気付いているだろうか。日本では、「安全と水はただ」という言葉を耳にするが、決してそんなことはなく、影で支えてくれている多くの方々がいることを意識し、感謝しなければいけないと思う。

私は、ランドセル支援からアフガニスタンの水事情を調べ、私達が住む日本の水道事業の素晴らしさを知った。また、水が安全であることは決して当たり前ではなく、とても貴重なことであることを理解した。世界中には生活用水の不足で困っている国が多く存在する。そのような国への支援も大切なことであるが、私達の国の水の安全性や水資源を守っていくこともより大切なことであると思った。

入選

綺麗な水を飲めるということ

和歌山信愛中学校　二年　野中（のなか）　沙夕里（さゆり）

私は、水を飲んでいる時、ふっとある疑問が頭に浮かんだ。それは、「綺麗な水を飲める国って、どの位あるのだろう？」というものだった。この当たり前だと思っている生活を送ることができる国の数が気になったのだ。

その後、調べてみた。すると、水道水を飲めるのは、百九十六か国の内、たった十四か国程しかないという。驚きだった。また、かなりショックでもあった。アフリカ大陸のほとんどが安全でないのを知っていたとは言えど、ここまで少ないとは思ってもみなかったのだ。この十四か国の国に含まれていないのは、水道水ではなく、ミネラルウォーターを買わなければならない国や、ミネラルウォーターすら無い国である。

世界で安全な水を手に入れられない人は、六億六千三百万人、汚れた水で死ぬ子供は、毎日八百人。かなり凄い人数である。何故これほどの人数が汚水を使用しなければならないのか。そんなことも気になった。

どうも、貧しい地域には政治の関心が向かないらしい。そのため、井戸があっても壊れたままだったり、整備されていなかったりするそうだ。そのおかげで、貧しい地域の子供たちが毎日水汲みのために何kmも往復しなければならず、教育も受けられていない。安全な水が手に入るかどうかでその子の人生も決まるということだ。

日本ではそんなことは有り得ない。蛇口をひねればすぐに綺麗な水が出て来るし、その水を飲んでも安全だからミネラルウォーターを買う必要もない。だから、毎日歩いて水を汲んできた泥水を飲むということは想像がつきにくい。だからといって無視をするのではなく、出来ることをすれば良い。

政治家ではないから国や県を動かすことはできないが、少しでも助けることは可能だ。

例えば、募金。駅前でもたまに見かけるし、年に何回か行っている地域もあるだろう。これは簡単なことだが、たくさんの人を救うことができる。私も小学校の時に、児童会の活動で、『赤い羽根募金』を行ったことがある。その日は授業参観だったから、たくさんの保護者の方々が来ていた。ほとんどの人がお金を入れてくれて、募金のためにわざわざ家まで財布を取りに帰ってくれた人も居た。こんな人が増え、団結することで世界は成り立つのかもしれない。

自分には関係ない、と考える人もいるが、それは大間違いだ。むしろ、この世の人々全員が当事者とも言える。一人の少しの行動で、希望が見えてくることだってある。その行動を何万人もの人が行えば、その分希望も大きくなる。当たり前の生活に感謝し、当たり前の生活を送れていない国を支援する。これが恵まれた国の使命だと思う。

国が豊かになれば、心も豊かになる。そんな世界をつくる原点が綺麗な水だと思う。水によって世界が救われることを、私は祈っている。

入選

水と木のつながり

和歌山県立田辺中学校　二年　村上（むらかみ）　すみれ

水は、人間が生きていく上で無くてはならない大切なものですが、ある瞬間に、恐ろしい凶器となり我々人間におそいかかってくることがありました。最近、大雨が降り、土砂崩れなどの災害が度々起りました。私の住んでいる所でも、二〇一一年台風一二号による大災害がありました。紀伊半島豪雨災害と名付けられています。紀伊半島の南部に大被害を与え人命をうばい、家を押し流してしまったようです。この時には、私はまだ幼児でしたのでよく知らなかったのですが、当時の写真を見て、大変なことであったと驚きました。何故このような災害が増えているのでしょうか。

原因の一つとして、「雑木の減少」があげられます。雑木というのは、スギやヒノキといった建築用材として利用される木ではなく、経済的価値は決して高くないですが、保水力が高いことが特長です。保水力が高いということは、急激な大雨が降っても、根に水を一時的に貯えることが出来るのです。木々の保水力によって、たくさんの雨水が一気に流れ出さず、山を守ることになるのです。いったん地下に貯えられた水は、浄化されて川に出て行くので、洪水を防ぐことが出来るのです。しかし近年、雑木は伐採され減少しています。それは、建築用材として利用されるスギやヒノキを植栽するためです。建築材料として利用される木は、保水力が雑木より少ないので、二次災害を防ぐことはあまり期待できません。建築資材となるスギやヒノキも大切ですが、山や川や周辺の地域を守るためには、保水力の大きい雑木も大切です。この二つの種類の木をバランス良く山に植える必要があると思います。

他にも木と水の間には、深い関わりがあります。その一つとして、今注目されている地球温暖化の防止があります。最近、ゲリラ豪雨といわれる大雨がひんぱんにあり、色々の災害を起していますが、その原因は、地球温暖化にあります。地球が温かくなることで、水を多く含んだ雨雲がたくさん出来、大雨の量も増えるのです。この地球温暖化は、二酸化炭素が空中に多く排出されることが原因ですが、木々は二酸化炭素を吸収する働きがあります。ですから地球温暖化を防止し、このことで大雨がひんぱんに降ることが少なくなるのではないでしょうか。

今、多くの専門家の人々が、荒れた山のことを心配し、自然の山にもう一度戻そうと活動しています。この活動は、私の住む地域だけでなく全国規模で行われています。

一見すると水と木は関係がないように思いますが深い深いつながりがあります。木はもちろん水がないと育ちません。木によって山が守られてきれいな水が提供され、又色々な災害も防止してくれます。

改めて、自然の連鎖がわかり、環境の保全が大切であることを教えられました。

私達が、毎日口にしている美味しくきれいな水は、保水力の高い大きな木の根に包まれた後、地下水となり、長い長い旅をして私の手元に届けられることを知りました。これからは一滴の水も無駄使いしないようにしなければいけないと思いました。

佳作

限りある水

和歌山県立田辺中学校　二年　岩本（いわもと）　彩乃（あやの）

私は家族でよくキャンプに行きます。いつも私たちがキャンプをする所は、キャンプ場ではなく私の祖父が建てた小さな家がある静かな山の中です。すぐ近くには川が流れており、とても自然が豊かな所です。

キャンプに行くと、電気はなく、いつも困ってしまいます。だから、火を起こしたり、スマホを使ったりし、明るくしています。しかし、一番困るのは水です。水は電気のように代わりになるようなものはありません。人間、電気は無くても生きることは可能ですが水がないと三日ほどしか生きられません。だから私たちは、大きな容器にたくさん水を入れて持って行きます。極力その水は使わないようにし、少し手が汚れた程度の場合、川からくんできた水を使用します。このように、大切に大切に水を使っていますが、やはり家から持参した水道水はすぐになくなってしまいます。料理や歯みがきなど、体内に入るものはきれいでありたいのでたくさん使ってしまいます。可能であれば、たくさんある川の水を使いたいと思います。しかし、いくらきれいな川に流れる水だとしても、体に害を与えるような、目に見えないものが混ざっているかもしれません。そんな水よりも、厳しい検査を受け、安全が確認された水の方を誰もが好むはずです。そんな限られたきれいな水をよく考えて、大切に使っています。

この経験はとても大切だな、と思います。もし、災害が起きて私が被災者になったとき、キャンプを経験していなければきっとパニックになってしまうだろうな、と思います。今までは普通に過ごしていたのに急に電気が止まり、ガスも止まり、そして水も止まってしまうかもしれません。災害はただでさえこわいのに、環境まで変わってしまうと体も心もきっとついていけなくなってしまいます。しかし、それより以前に楽しみながら電気、ガス、水が制限された環境にいた経験があると、きっと役に立つと思います。実際、被災者になった人がキャンプの経験が役に立ったという話も聞いたことがあります。だから、みんながキャンプをすることで楽しみながら備えられるのではないか、と思いました。

私はキャンプを経験して、水に対する考え方はガラリと変わりました。水は限りあるものだから大切に使わないとと、いつも思っています。そして自ら、蛇口をこまめにしめたり、水を必要以上に出さないようにしたり、行動にうつすことも心がけています。そして今は、普段から水に感謝し、大切に使っています。

今よりも、もっともっと多くの人がキャンプなど、楽しいことを通して「水のありがたさを知り、水を大切にできるといいな。」と思います。そして私自身も今よりももっと水に感謝し、水の使い方を改めて考え直し、今後も今以上に水を大切にできる人になろうと思いました。

佳作

泥水を飲む子供たち

近畿大学附属和歌山中学校　一年　鎌苅（かまかり）　隼英（しゅんえい）

ぼくは、ある夜家族とテレビでドキュメンタリー番組を見ていた。そこには汚れた器で泥水を飲んでいる子供たちが映し出されていた。ぼくは「こんなん飲むん？」と、声に出して言っていた。土の上の水たまりの泥水を器で取りそれを飲んでいたのだ。ぼくの、７才の妹ぐらいの子供も飲んでいた。水道がなく、泥水が唯一の飲みものだと言っていた。子供たちがたくさんその一つの水たまりに集まっていた。

日本では蛇口をひとひねりするとキレイな水が出てくる。トイレの水さえもすき通っている。ぼくは、水はすき通っていて、どこにでもあるのがあたり前だと思っていた。ぼくがいった日本のどこでも水はキレイだった。

両親に海外旅行に行った時の話を聞いた。アメリカ、韓国、タイ等どこの国でも泥水を飲むことなんてなかったと言う。ただ生水を飲むとお腹を壊すので、水は買って飲んでいたらしい。日本では水を飲んでお腹を壊したり、死んでしまったりすることはない。しかし、確かに泥水を飲料水としている子供たちが世界にはいるのだ。ぼくは、視野を広げてもっと多くの世界を見る必要性を感じた。

テレビでは泥水を飲み命を落とす子供たちも少なくないと言っていた。ぼくは、水で命を落としてしまうことに、驚き、衝撃を受けた。

水がなければ人は生きていけない。しかし、その水を飲むと死んでしまう。けれども、飲むものは危険な水しかないのだ。このようなむごいことが、世界のどこかで起きている。ぼくはとても悲しい気持ちになった。水を飲んだら死ぬなんて。ぼくより小さな子供たちが、そのような厳しい環境で生きていかなければならないなんて、ぼくはやりきれない気持ちになり胸が痛んだ。

ぼくたちが今出来ることは何なのだろう。ぼくは何をすればいいのだろう。きっと、ぼくたちが現状を知り、どうすれば世界中の全ての人が、安全な水、おいしい水を飲むことができるのかを、考えていかなければならないことだと思う。

今のぼくには、何の力もないけれど、これからは水を大切にしていくことを意識して生活しようと思う。今後は、世界の環境問題にも目を向け、学んでいけたらいいと思う。そして、世界には泥水を飲むしかない子供たちがいることを、しっかりと心に留めておこうと思う。

佳作

これからの魚との未来

和歌山県立田辺中学校　二年　木本（きもと）　花菜（はな）

一年生の国語の授業で、幻の「クニマス」という魚が登場する、「幻の魚は生きていた」という説明文について勉強しました。この説明文を簡単に要約すると、絶滅したと考えられていたクニマスが、以前生息していた秋田県の田沢湖から遠く離れた山梨県の西湖で発見された、という話でした。クニマスが絶滅してしまった原因となったのは、人の手によってもたらされた、環境の改変でした。さらに、田沢湖付近の人々の、クニマスを巡る文化も、クニマスと共に消えていってしまいました。この話だけを聞けば、クニマスを追い出してしまった人々が悪いと思われがちですが、自分達の生活のためには仕方のなかったことだったのです。どうするのが最善策だったのか、私が言いたいのはそこではありません。誰かははっきりとは記述されていなかったのですが、クニマスの卵を、絶滅前に西湖を含む、計三ヶ所に譲渡した人がいる、ということです。ここでクニマスは、もともといた田沢湖と、クニマスが産卵して生存できる環境と条件が偶然にも一致した、西湖で生存していたということでした。これは後に筆者が調べて記述していたことなので、実際譲渡した時には分からなかったことだと思います。水温が少し違うだけで死んでしまう魚や、水深が少し違うだけで死んでしまう魚もいる中で、クニマスの条件は他の魚と比べて厳しいものだと思うにもかかわらず、ぴったりの場所を見つけ、そこにとどまれるクニマスもすごいと思いました。

現在、地球温暖化で海面が上昇していることや、気温が上がっていることが問題視されています。これによって川の水温が上がってしまうと、またクニマスは別の方法ですみかを失ってしまうことになります。もしかすると、きちんと温度管理ができるところ、例えば研究室にいるかもしれませんが、いずれクニマスを自然に還すときが来ると思います。そのとき、クニマスが生きていける環境がどこにも無かったら、もしくはゴミなどが一つも無い、綺麗な海なんてなくなっていたら。そう考えると、海だけでなく、陸上でゴミを捨てている人にも少し嫌悪の気持ちをあらわにしてしまいます。クニマスだけでなく、鮭や鰻、鯛など、普段何気なく見ている魚だって、いなくなってしまうかもしれないのに。それを重々承知で捨てているのか、といわれると何も言えなくなってしまうと思います。

だからこそ、プラスチックごみを減らす取り組みをもっと進めるべきだと思うのです。例えば最近の取り組みとして挙げられるのは、エコバッグを使用することや自然分解されるプラスチックの開発、再生可能エネルギーの開発などです。このような取り組みをコツコツと続ければ、今までのように、クニマスを含め様々な魚と共存することができるのではないでしょうか。そのために、私自身に出来ることがあれば、やっていきたいと思いました。

佳作

安全・安心な世界にするために

海南市立巽中学校　二年　楠本（くすもと）　志保（しほ）

私達にとって水は、生きていくうえでも生活するうえでも不可欠な資源です。

日本は世界と比べると上位にくるほど水がきれいだとよく聞きます。しかし、海外の水はどうでしょうか。私は、日本と海外の水に関する日常を比べて書いていこうと思います。

日本では、じゃ口をひねればすぐ水を飲めたり洗い物や料理にも使用したりすることができます。とくに飲み水に関しては、個人的に「少し売っている水より鉄のようなにおいがある気がする。」と感じていますが、今まで水道水を飲んで体に害がでたことがないので、危険か安全かで問われると安全だと思います。

次に外国はどうでしょうか。外国も日本と同じようにじゃ口をひねれば水がでてきます。でも、外国の人達は、飲み水などの体に含む水は、お店で買って来た水を使用しているとよく聞きます。また、じゃ口から出てくる水も無く、毎日何回もきれいか分からない川に水をくみに行っている子供達が世界には少なからずいます。

ここまでで、日本と外国の水のきれいさや、水に対する思いも違うと分かると思います。

まず、日本と外国で水のきれいさが何故違うのか調べてみました。

日本は、水道法によって水道の水質基準が守られているからだということが分かりました。水道水は、定期的に約二百種類もの検査を行います。そして、浄水場で汚れを取り除き、消毒した状態にするという厳重な検査を行っているからこそ、きれいで安心・安全な水道水ができていました。

外国は、国土の面積やコスト面の問題があることが分かりました。例えば、日本は小さな国なので、整備を進めやすく、費用も大きな国と比べるとそこまでかかりません。ですが、アメリカや中国などの大きな国は、時間も費用もかかるので簡単ではないということでした。また、水道自体が無い国は、きれいとは言えない川の水を使用しているということもわかりました。

次に、人々の水に対する思いの違いをまとめていこうと思います。

私達日本人は、じゃ口から水道水が出て、それを口に含めるというのが当たり前。家に飲める水があるのは当たり前と思っている人の方が多いと思います。ですが、外国の人達は、「スーパーに買いに行かなきゃ。」「川に水をくみに行かなきゃ。」など不便な思いを感じている人が多いと思います。

そこで私が提案することは、二つあります。

一つ目は、清潔な水を寄付するための募金をもっと広く知ってもらうためにＳＮＳを活用していくことです。私は、今回の作文で初めて「ウォーターエイド」という活動を知りました。ウォーターエイドとは、開発途上国で清潔な水とトイレを利用できるようにするための支援を行っている国際ＮＧＯです。ウォーターエイドにはたくさんの人が関わっているので、私達が募金するだけでも現地の大勢の人達がそれを上手に利用して、寄付したお金のおかげで水不足に悩んでいた人々も笑顔にでき、水によって病気になることを防げて、若くして亡くなる人も減らせるという利点があるからです。

二つ目は、今の日本の水の知識を広く知らせるということです。これは、専門知識を持っている人にしかできませんが、他の国に話しに行くのは良いと思います。そして、そこでコスト面の問題なども話して良い案がでれば困っていた国も改善することができ、それは世界的にも良いことだと思うからです。

最後に、日本は本当に水に恵まれている国だと思います。ですが、今のままでは水に困って生きている人の方が多いと思います。だから、こういう場面で、もっと積極的に改善策を考えていくことはどんな国でも重要になっていくと思います。

佳作

海とのつながり

和歌山市立加太中学校　二年　島本（しまもと）　翼（つばさ）

私たちが住んでいる和歌山市加太は漁師町で、海と関わることが多いです。その海にはたくさんの生き物がいます。

海にはすばらしいことがたくさんあります。一つは、景色がきれいだということです。例えば、夏の海が日差しで輝いている様子や船や海の後ろに夕日が沈んでいく様子がとてもきれいだと思います。また、たくさんの魚がいます。特に加太では鯛が有名で、地域の家庭ではお祝いの日などに食べられるなど、特別な魚なのです。他にも、夏になれば海水浴ができます。このように海にはたくさんすばらしいことがあります。だから、他府県や外国から観光客が来て、にぎわいます。

しかしその一方で、台風などの自然災害や人のせいで、海や浜はゴミがたくさん落ちてしまっています。ゴミを減らすために私たちができることは、たくさんあります。例えばポイ捨てをしないことや、見つけたゴミは拾うこと、ゴミを捨てないようにという注意のための呼びかけや看板を立てるなどができると思います。そして、このような取り組みをすることで、加太の海の景色や生き物、そして地球も守れると思います。海を守ることで、他のたくさんのことにつながっていくと思います。

他にも、私たちは海を守るためにたくさんの取り組みをしています。その一つに、加太の文化があります。加太には昔から伝わる伝統行事である、えび祭りがあります。えび祭りでは、加太の地域ごとに分かれて、みこしやししまい、なぎなたなどを披露しながら神社を回ります。加太では、昔は伊勢えびがたくさん捕れたので、地域の家庭では昔から、えびに対する感謝をしていたそうです。また、地域の神社である加太春日神社にとっては一年のうちで最も大事なお祭りです。私たちも、このような伝統を次の世代につなげていかなくてはならないと思いました。

加太の小学校では、水に関して、他の学校との交流も行っています。それは、紀の川によってつながっている奈良県の川上村という場所との交流です。川上村の人たちは、自分たちの川の下流にある海の学習をしていて、加太では海の元になる川の学習をしていたのです。お互いが、自分たちの大切な場所とつながっている場所のことを知り、そしてその人とのつながりも大切にできるということを目的として、交流をしています。私たちはその川上村に実際に行き、そこで川遊びのこと、ダムについてのこと、自然の大切さなど、たくさんのことを学びました。その後は、学んだことを生かして加太の海を守っていきたいと思いました。

そこで私は、観光客がバーベキューした後のゴミなどを拾うことにしました。ゴミ袋に入っているゴミを見て、達成感がありましたが、同時に浜や海はまだまだ汚いのだなと思いました。しかし、地域の人たちが力を合わせて清掃をしているうちに、少しずつきれいになっていきました。みんながんばったおかげで、海の生き物が元気になったり、浜辺の景色がきれいになったりしたと思いました。

このように、海にはたくさんのつながりがあると、改めて考えるようになりました。そのつながりを、守るために何ができるか、考えて行動することが大切だと思います。それは海に対することだけでなく、他のいろんなことに対しても同じだと思います。

今はコロナウィルス対策のため、人が集まるような行事は少ないですが、海をもっときれいにして、生き物や景色を守ったり、加太がにぎわいを取り戻したりしてほしいなと思います。

佳作

水と言の葉

和歌山信愛中学校　二年　谷（たに）　桃子（ももこ）

授業中、とある先生が言った。

「水と言葉は似ていますよね。」と。

最初は何を言っているのか分からなかった。なぜなら私は水と言葉の共通点を見つけられなかったからだ。すると先生は、「言葉は、私たちが生活する上で必要不可欠です。それは、水も同じですよね。私たちは水無しでは生きていけません。でも、それらが人を傷つける凶器になることもある。発せられた言葉で死に追い込まれることだってある。水に殺される人だっています。」と言った。

確かに、と思った。でも、それらを上手く活用することで、人のため・生き物のためになることもあるのではないか？そこで、この文では二つの観点から私の意見を述べようと思う。

一つ目は、上手く活用すること。何度も言うが、水と言葉は生きるためには必要なものだ。ここでは飲料水を例に挙げてみる。

飲料水は、もちろん清潔でなければならない。理由は言うまでもなく、不衛生なら身体に悪影響を及ぼすからである。私たちは、蛇口をひねると当たり前に透き通った綺麗な水が出てくる、豊かな環境で生活しているが、どこでもそうとは限らない。

アフリカの国々での水の確保場所は、池や川がほとんどであることはご存知だろうか。池や川ということは、もちろんろ過もされていなければ消毒もされていない。そんな水を飲めば、寄生虫や病原体などに襲われることだってある。実際にそのような水を飲んで命を落とす五歳未満の子供は、二〇一五年時点では毎日八〇〇人にのぼっている。本来、このようなことがあってはいけない。ここで、言葉を使うのだ。皆に平等に安全な水が供給されるべきだと主張し、少しでも水によって苦しめられる人が少なくなるなら、これは水と言葉を上手く活用できていると私は思う。

二つ目は、凶器にもなる点。皆さんは、濱口梧陵という人物を知っているだろうか。稲むらの火で有名なあの偉人だ。一八五四年十二月二十四日、和歌山県で津波を伴う地震が発生した。そのとき彼は、避難の目印として稲に火をつけた。ここまでは有名な話だろう。だが、そこで彼は言葉を用いて叫んだ。「逃げろ、逃げろ、こっちだぞ！」と。結果的には彼の言葉と勇気のおかげで村人の大半が救われた。

津波は、水が持つ裏の顔、つまり人を傷つける凶器となる面である。しかし、言葉で人は水の恐怖から救われた。

このように、水と言葉は一蓮托生である。つまり、これらは自然災害と同じように、完全に支配・管理できるものではない。だからこそ、一人一人の気遣いや心掛けで助かるものがあるかもしれない。なら、私たちは水と言葉を上手く使うべきではないかと私は思う。

佳作

自分達にできること

和歌山県立田辺中学校　一年　田野（たの）　桜清（おうせい）

いま、テレビ局で、「地球を笑顔にするＷＥＥＫ」という企画をしています。この企画は、地球環境を守るため、世界のすべての人が幸せにくらすために掲げられた目標「ＳＤＧｓ」に向かって行動しようというものです。大きな目標のために、個人の工夫で、ぼくも頑張ってみたいと思います。

そこで僕が注目したのは、十七個あるＳＤＧｓの目標の一つである、「安全な水とトイレを世界に」です。サブタイトルは「すべての人に水と衛生へのアクセスと接続可能な管理を確保する」です。これだけ言われても、何をすればいいかあまりピンと来ません。だから、その目標に六つあるターゲットを見てみました。主に、「全ての人に安全で安価な水が届くようにする」「全ての人に適切で平等な下水処理・衛生施設を届ける」「野外で排せつをなくす」「水の汚染を止め、水質を改善する」「水に関する生き物の生態系を守る」「海水の淡水化」などです。僕が力を入れたいと思っているのは、四つ目「水の汚染を止め、水質を改善する」です。水が汚れる主な原因は、人間によるものです。人間が出すごみが川や海に流れることによって、マイクロプラスチックが水に混じり魚などの体にそれが入っていきます。またその魚を介して人間の体にも有害物質として入ってきます。マイクロプラスチックの流出を防ぐため、海や川などでごみ拾いが行われています。

ぼくも数年前に、白良浜のごみ拾い活動に参加したことがあります。白浜は家から近く、砂浜のごみ拾いがあると聞いて楽しみにしていました。日本でも有名な観光地、白浜。たくさんの人が訪れる場所とあって砂浜も結構汚れていました。時間は三十分くらいで、一人で拾った量も全体の量からするとわずかでしたが、他の参加者たちも、皆同じくらいの量でしたが、わずかな量×大人数＝たくさんの量、つまり、「ちりも積もれば山となる」です。まわりを見ると、ごみ拾いが始まる前よりも明らかにごみが減っていました。終わった後のお茶はとてもおいしく感じました。こんな小さなことでも、みんなが協力すれば地球を守ることにつながるんだなと思いました。「自分が地球環境・海の水を守っているなんてすごい。」と誇らしくなりました。

このことから、自分でも水を守れると実感が湧きました。「そんな大きい目標自分にはできない。関係ない。」と思い込んでしまうことは勿体ないことです。水を守ることは、地球を守ることにもつながります。その達成感で次へのモチベーションにもつながります。そうすると、だんだん楽しくなってきます。このように楽しみながら、みんなで守っていけたら、一番いいと思います。ですから、一度やってみて、世界の人と協力しながら、これからの地球、すべての人々が幸せにくらせるような世界を目指していきたいです。

佳作

美しい地球

和歌山信愛中学校　二年　野間（のま）　心葉（ここは）

今回、水のお話を考えた時、ふと「風の谷のナウシカ」を思い出しました。作品では、世界が「腐海」に飲み込まれ、それまできれいだった水や空気や土までもが、毒を出してしまう、マスクなしでは、人間が生きて行く事も出来ない世界が描かれていましたが、こんな世界が私たちの地球にも来るかもしれません。

美しい地球という言葉をニュースで宇宙飛行士の野口聡一さんが話しているのを聞いたことがあります。地球は「青い惑星」と言われるほど、水が多く、約１４億㎥とされる水によって表面の７０％が覆われています。そのうち、９７．５％は塩水で、淡水は残りの２．５％にすぎません。しかも、淡水の約７０％が氷河、氷山として固定されており、残りの３０％のほとんどが土中の水分、あるいは地下深くの帯水層の地下水となっているそうです。

そんな、ごくわずかな２．５％の淡水を私たち日本人は大切にし、明治時代ぐらいから、上下水道の整備を先人達の努力で進めて来ました。上水道は、ほぼ１００％近く、下水道も７０％を超えるほど普及しています。これは、世界的に見ても大変素晴らしいことです。ところが、私たち現代人は、この便利に使える水を大切にする心を忘れかけているかもしれません。蛇口をひねれば、すぐに水が出て来るからといって、出しっぱなしにしたり、必要以上に使ったりしているかもしれません。思い返してみると、シャワーの使いすぎや、水の出しっぱなしは身に覚えがあります。便利だからこそ、水をぜいたくに使っていたのかもしれません。

テレビでは世界の水に苦しむ小さな子どもたちの映像を見たことがあります。彼らは、きれいな水を求めることも出来ず、泥水でさえ、飲み水にしていたそうです。そして、そのような地域の人々は、とても水を大切にしています。現在の私と比べると反省すべき点がいくつも見えて来ました。

今、世界的に、地球の限られた資源が減少していることも聞いています。水が枯れてしまってからでは遅いのです。生きて行くための命の水を守る運動を、私たち若い人もやって行かなくてはなりません。私が出来る水の無駄使いをやめて、水の貯金をぜひ皆で進めて行きたいです。町かどのポスターで水の大切さを伝えたり、水の取り組みで新しくエネルギーを見つけたり、何より、毎日使う水のありがたさを家族と実感しながら、社会に出て行けるように色々学んでみたいです。

佳作

水との共生

和歌山県立向陽中学校　二年　濱本（はまもと）　光祐（みゆ）

まだ幼いころの事だった。私は、家族で海に来ていた。初めは砂遊びをしたり、海の浅い部分でボール投げをしたりしていた。父がバーベキューの肉を焼き始めたころ、私と母はほんの少しだけ深い部分に入っていった。海について無知な私は、母が水着のひもを直している数秒の間に、さらに深い部分へと泳いでいってしまった。一応浮き輪につかまっていたものの、体の小さい私は水圧に耐えきれず手を離してしまい、そのまましばらくおぼれた。必死に抵抗したものの、水は私の動きに従ってはくれなかった。母が気づいて助けにきてくれるまでがとても長く感じた。鼻や口から海水が入りこみ、目はヒリヒリと痛んで開けず、なぜかふくらはぎははれあがっていた。母が来るまで、私はただ流されていた。何もできず、水に流されるがままだった。浜辺についてふくらはぎを確認してみると、どうやらクラゲに刺されたらしい。はれあがった部分には不思議な形をした跡が残っていた。その時私は、初めて水に対する恐怖を覚えた。押しよせてくる強い波、よくわからない生物、目にしみる海水……。恐怖以外の何ものでもない。海やプールや川を問わず、とにかく水につかって泳ぐことが嫌になってしまった。

昨年警察庁より発表された、一昨年の水難事故の件数は、千二百九十八件らしい。その内死者数・行方不明者数は六百九十五人とされている。私達が普段何気なく使っている水は、こんなにも多くの人の命を奪っているのだ。水がなければ生きていけないけれど、水のせいで命を失うこともある。私達は、そんな生死の線引きとも言える「水」とどのようにして関わっていけば良いのだろう。水難事故でなくなった人の中には、私のように水の恐ろしさを知らずにいた人もいるのではないか。水の恐ろしさや、水がいつも便利な訳ではないことをみんなに伝えていくことで、水への意識が変わり、事故も減少するはずだ。まだ幼かったと言えど、あの時私は、いつも手の届く場所にあるような何気ないもの、「水」がこんなにも簡単におそってくるなんて知らなかった。それは水について無知だっただけでなく、水を安全だと思いこんでいたからにちがいない。私達は毎日水を飲む。食事もとる。食事には、水分が含まれている。先ほど述べたように、水なくして人は生きていけない。そんな水が凶器となった時、個々がどのような対応をするかが鍵となってくる。水についての理解を深め、限りある資源として大切にしてくること、時に命を奪う凶器になるということを忘れないでおきたい。

佳作

私たち人間ができること

すさみ町立周参見中学校　一年　前田（まえだ）　真優（まゆ）

水の惑星といわれる地球上に水不足の問題があるのはなぜでしょうか。

小学校のときに、総合の授業でＳＤＧｓの勉強をしました。目標の一つに、水についての問題がありました。私自身はその問題に当てはまらなかったので、あまりイメージがわきませんでした。なぜなら、蛇口をひねればきれいな水が出て、手が洗えて、トイレができて、お風呂が入れて、料理、洗たくもできているので、直接困ったことがないからです。

しかし、その問題というのが、世界には、安全な水を飲めず使えない人は約二十二億人、きれいなトイレを使えない人は約四十二億人いるという内容でした。私たちが生きていくために必要不可欠な水が、不衛生なまま利用されることによって、下痢や感染症で亡くなる人がいるのを知って、とても残念に思いました。

また、世界の人口が増え、経済発展が続きこのままの消費が続くと、二〇五〇年には、四人に一人が水不足になると予想されています。一番最初に思ったことは、「地球の七割が海なのに、なぜ水不足になるんだろう。」でした。疑問に思ったので調べてみると、海水は塩分濃度が高いので飲み水としては問題があり、そんな単純なことではありませんでした。

海の水が蒸発し、水蒸気となって、雲となり、雨になります。したがって、雨水は生活水として使えるそうです。幸い日本は、雨や雪の降水量が多いので、水には困っていませんが、世界には雨が何か月も降らずに長期間の水不足の状態が続くかんばつがおこる国もあります。

これは、地球温暖化による影響でもあります。かんばつだけでなく、雨の多い地域では、洪水が増えて水被害もおきています。その他にも、自然生態系が狂い、絶滅していく種類も出てきます。

今回、この作文を書くにあたって、家族と話した中で、海面上昇の話が出ました。私の父は漁業を営んでおり、若いときから海は身近な存在でした。その父が言うには、五十年ほど前より、今は海岸がせまくなっていて、満潮時の水位が確実に高くなっているそうです。さらに台風の勢力も大きくなっているので、とても心配だと言っています。それを聞いて、「いつか、海水があふれて町が水没するのではないか。」と私も心配になりました。世界では、すでに水没している国もあってびっくりしました。地球温暖化を防ぐために、私にできることはなんだろうと考えました。電気をこまめに消すやテレビのつけっぱなし、エアコンの設定を調整するなどの省エネを心がける、そして、節水です。お風呂でお湯を出したままにしない。また、お風呂のお湯を洗たくに再利用するなど、簡単なことです。それを私たち一人一人が意識することが大切だと思います。

私の願いは、世界中の人々が、きれいで安全な水を使えるようになることです。そのためには、私たちが当たり前を当たり前だと思わずに、水を大切に使うことが必要だと思います。

第４３回「全日本中学生水の作文コンクール」概要

第４５回「水の週間」の行事の一環として実施された作文コンクールの概要は、次のとおりです。

１　応募要領

①テ ー マ・・・「水について考える」（題名は自由）

②対　　象・・・中学生（中学生と同じ年齢の方を含む。）

③原稿枚数・・・４００字詰め原稿用紙４枚以内、日本語で表記された個人作品に限る。
題名・学校名・学年・氏名（ふりがな）を記入する。

④あ て 先・・・和歌山県庁　地域政策課
〒６４０－８５８５　和歌山市小松原通１－１
ＴＥＬ　０７３（４４１）２４２３

⑤応募期間・・・令和３年５月７日締切り

⑥版 権 等・・・○応募作文は自作の未発表のものに限る。
○応募作品の版権は、主催者に帰属する。
○応募作文の返却は行わない。

２　応募結果

応　　募 学　校　数	応　　募 総　　数	学　年　別		
		１年	２年	３年
校 ７	編 ５２０	編 １３３	編 ２８８	編 ９９

３　審　　査

和歌山県審査において、優秀賞３編、入選５編、佳作１０編あわせて１８編の入賞作文を決定。

（協 力　和歌山市中学校国語教育研究会）

４　表　　彰

（１）賞および賞品

賞	賞　　品
優秀賞	賞状、図書カード
入　選	賞状、図書カード
佳　作	賞状、図書カード

（２）表彰式

優秀賞の受賞者を令和３年８月４日、和歌山県庁において表彰

8月1日は水の日

未来へうけつごう
日本のきれいな水

- ポケットモンスター
- No.134　シャワーズ
- タイプ　みず
- とくせい　ちょすい

水循環基本法に基づき
8月1日が「水の日」と定められました。
8月1日から7日は「水の週間」です。

シャワーズは綺麗な水辺に生息し、
細胞が水の分子に似ていることから、「水の日」を応援しています。

http://mizunohi.jp　水の日　検索

2021ミス日本「水の天使」
嶺 百花

写真：刈込池（福井県大野市）

「健全な水環境」ロゴマーク

［主催］水循環政策本部、東京都、水の週間実行委員会ほか
［後援］文部科学省、厚生労働省、農林水産省、経済産業省、環境省ほか
「水の日・水の週間」に関する情報は各ホームページへ
（各府省庁、国土交通省、水の日・水の週間）

©2021 Pokémon ©1995-2021 Nintendo/Creatures Inc./GAME FREAK inc.
ポケットモンスター・ポケモン・Pokémonは任天堂・クリーチャーズ・ゲームフリークの登録商標です。